

地球温暖化問題と環境思想

岡島成行

きょうは「温暖化問題と環境思想」ということで、若干、かた苦しい内容かもしれませんが、お許しください。実は、私は子ども時代から山登りが好きで、中学のころから神奈川県丹沢で登っておりまして、横浜の街中で育ちましたので、よいいに山とか自然に憧れました。街中は、セミでもアブラゼミぐらいしかいません。だから、ミンミンゼミとかクマゼミみたいなものが憧れの的でした。釣りも横浜だと海でハゼを釣るぐらいで、セイゴのようなものが釣れたら結構うれしかったという程度でしたが、山のほうに行くとウグ

イとかいろんな種類がいて、モリで突いたりして遊びました。

そういうものに憧れて、高校と大学では山岳部に入っていました。

山に登っていると気が大きくなるというか、都会のことを忘れるんですね。とくに大学の山岳部は夏山では1カ月も帰ってこなくて、その後も、余った食料を担いでもう一度、岩登りに友達と行ったりして、家に帰るまで2カ月ぐらいぼんやりしているわけです。冬はちよつと吹雪に閉じ込められると1月半ばまで下り

られない。すると、大学の試験が終わっていたりします。2月、3月あたりには春山合宿があつて、1カ月以上、山に入っているわけです。帰って来ると、もう追試験が終わっている。結局、大学を出るのに7年かかりました。どの大学でも山岳部の人間は4年で卒業していなかったです。そんな、のんびりした時代でした。

山から教わったこと

私は上智大学のドイツ文学科に入りましたが、文学部ではなくて山岳部に入つたみたいで（笑）。本も読みましたが、しかし、山から教わったことがすごたくさんあります。これは不思議なことなんです、冬山なんかで命からがら死にそうな思いをして帰ってきたりすると、哲学書とか、仏教の本などがわかるようになります。滝に打たれて修行するとかいったことと似かよっているんでしょうか。激しい自然の中で、もまれ、もまれて帰ってくると、人間の命なんて本当にはかないことがよくわかります。冬の穂高の岩場を

登って、ザイルをつけ、ハーケンで打って体を結わえつけて、3日も4日も吹雪がやむまで待ったりします。「吹雪があと3日続いたら死んでしまうな」と思うわけです。人間なんて非常にはかないもので、一生懸命、何万回と山を歩いていても、1回すれば死ぬわけです。それから、山の上から下を見ると、いっぱいいる登山者が「点」のようにしか見えない。そうすると、お釈迦様とかキリストとか、神様や仏様から見ると、人間なんてそんな「点」のようなものではないだろうかと感じたりするわけです。高いところから見ると、その人が背が高いのか、美人なのか、金もちなのかどうなのかわかりません。人を評価するのに、しいて言えば、どれだけ一生懸命生きたのか、ぐらいいか評価のしようがないのではないか。18歳とか19歳でも、そう感じるわけです。そのように、自然から教わったことがいろいろありました。

そんな自分の体験から考えて、現在、子どもたちと自然を結びつける作業をしています。今の日本の子どもたちは自然から離れすぎてしまっています。きょう

お集まりのかなりの方々は、子ども時代に自然の中で自由自在に遊ばれた記憶があるかと思います。ところが、今の子どもは遊ぶのにも電話でアポイントを取って「何々ちゃん、明日遊べる?」とか言くと、「明日

は塾があるから、あさって遊ぼう」となる。昔は、

「何々ちゃん、遊ぼう」と、その家の前で大きい声を出したら出てきたものですね。公園なんか行ってみてください。乳母車を押している若いお母さんはいませんが、子どもが走り回ってカン蹴りだとかドッジボールだとかやっている姿を最近は見ることがない。ですから、非常に私も心配しまして、自然学校とか、子どもたちを自然の中に連れて行くことを皆でやりましょうという運動をやっています。江戸川エコセンターの理事長、千葉自然学校の理事長、トヨタ自然学校の副理事長など、さまざまなことをやっています。

そういうこともありまして、本日は「環境思想」ということですが、私は学者ではないので、「環境ジャーナリスト」として、新聞記者時代からの経験談などを中心にお話します。基本的には、私たち個人が自然の

中でどういう振る舞いをしたらいいか。そのへんのところをいろいろ考えていくと、ある意味で環境思想のようなものになっていくのかなと思います。

公害から自然保護へ、そして地球環境へ

まず、環境問題がいろいろ変わってきているという点です。新聞記者として私は1980年ぐらいから環境問題の担当になりました。そのころ環境というところ「公害」という時代です。大気汚染の被害者や水俣病やイタイイタイ病の患者さん、加害者である企業、それから裁判所、弁護士、環境庁、このくらいを取材していれば大体、答えは出ていました。

ところが、80年代の中ごろになると、「自然保護」の問題が大きくなってきました。それ以前にも言われていると思いますが、「ダメじゃないか」「破壊がひど過ぎる」と言い出すのが80年代中ごろ以降です。長良川の河口堰、知床半島の伐採問題、中海・宍道湖の埋め立てなど、たくさん問題が出てきたところです。新聞記者も、それまでは公害だけやっていればよかつ

たのが、自然保護の問題もやるようになる。すると、今までは東京で取材できたのが、今度は白神山地とか、ひとつひとつ現場に行かなければいけない。記者の数は同じですから、忙しさはどんどんひどくなってきました。

そこぐらいまでは何とかりましたが、88年ぐらいから今度は〈地球環境〉問題がクローズアップされてきました。この問題は非常に難しく、記者のほうも最初はわからなかったのです。それで、気候の先生とかいろんな専門家のところに行って教わって、環境庁の役人さんと一緒になって勉強しながら、「温暖化とはこういう問題だ」とか、「オゾン層の破壊とはこうだ」ということを書き始めた。しかし、当時は読者もわからないわけです。ですから記事の後に「オゾン層とは」という注をつけたりました。今は、小学生でもわかっていきますが。

それから、地球温暖化は国際的な問題ですから、外務省も取材しなければいけない。また温暖化問題は経済直撃ですから、経産省（昔の通産省）、経団連、大企

業なども回らなければいけない。さらに政治家です。お聞きになったかもしれないですが、「京都議定書」を最後に決めたのは政治決着でした。（1997年に）橋本総理大臣とクリントンさんとが電話会談で、（日本は）マイナス6%、（アメリカは）マイナス7%、（EUは）マイナス8%にしようと決めた。このように、政策決定はかなりのトップがやるわけです。そうすると、社会部では手が届きません。政治部の記者の力を借りないと、政治家がまず相手にしてくれません。こうして政治部や経済部とも一緒にやらなければならなくなり、取材の方法も複雑になってきました。

最後の問題は英語です。インターネットが発達し、「アメリカ政府はこういう発表をした」「イギリス政府はこう発表した」と、毎日どんどん出てくるわけです。日本の環境省や研究者を取材して書いたとたん、もしくはその前に、すでにアメリカ政府は違うことを言っている可能性があります。ですから、一々チェックしなければいけない。英語が読めなければいけません。こんなふうに環境問題は複雑怪奇に拡大してしまっ

新聞記者が追いつけない状況になっています。

私の考えでは、「温暖化」だけで1人の専門記者が必要で、地球環境問題なんて9つも重要な問題がありますし（地球温暖化、オゾン層の破壊、熱帯林減少、開発途上国の公害、酸性雨、砂漠化、生物多様性の減少、海洋汚染、有害廃棄物の越境移動）、国内の問題があり、国の政策の問題がある。自然保護の問題がある。環境担当の専門記者が5、6人はいないと取材しきれないはずなのです。ところが、どこもそれほど人はいません。まだまだ、ジャーナリズムが環境問題に本気になっていないのではないかと思われるぐらい、目先の経済やお金の問題のほうが重要で、テレビにいたっては芸能の話ばかりです。あれだけ浮かれた話をするのだったら、5分でもいいから温暖化の問題でもやってくれないかと思います。

話はそれましたが、環境問題を理解するのは難しくなっていて、たとえば京都議定書とは何なのか。そこで決まったClean Development Mechanism (CDM)とか、排出権取引とか、よほど関心が高い人でないと覚えて

いません。日本は2008年から2012年までの間に温室効果ガスの排出量を6%減らさなければいけないというが、いつを基準して6%なのか。答えは1990年基準ですが、では日本は実際にできるのかできないのか、なかなかわかりません。正確な知識が流布せず、事実関係がわからなければ、環境問題もこわくとも何ともないわけです。ですから本当に基礎的なことを皆がある程度わからないといけないと思います。学校教育でも、そろそろ本気で「環境教育」に取り組んでほしいと思います。1+1=2とか、織田信長の後は豊臣秀吉とか、みんな知っています。それと同じように、温暖化というものはこういう問題です、被害はこうなります、今は「もったいない」という感情をもたないとダメですとか、1年生から教えれば6年までに、みんな覚えます。そして小学校6年生が10年経つと22歳になります。世の中が変わります。ドイツが、いい例で、私が環境問題を始めた1980年ごろは、それほど環境先進国ではありませんでした。むしろアメリカのほうがすごかったです。ところが、ドイツは

20年前から環境教育に国を挙げて取り組んで、現在では世界をリードする環境立国になっています。

生き方・思想の問題が中心に

こういうふうには複雑に拡大してしまった環境問題ですが、最初の問題は現実的な公害除去でした。汚い水が出たから、出ないようにしよう。硫黄が大気中にたくさん出るから、途中で吸い取る技術をつくらう。こういう理学・工学的な公害除去の学問です。

2番目には経済、法律の分野です。日本はとくに公害の場合は民法、法律の部門で非常に発達しました。損害賠償の部門では世界にも大きな影響を与えました。そして経済です。今、環境税とかいろいろ言っていますが、経済と環境の問題について研究がなされてきました。

しかし、3番目の分野がある。それは生き方の問題です。つまり温暖化問題でもそうですが、対症療法的な「ここが悪いから、ここを直そう」というようなものではない。人間がどのよう

に毎日の生活をするのか」「どのように生きていくのか」ということが問題になってきています。工学、農学、経済、法律のような、実学といいますが、そういう学問から、人間のあり方を問う学問のほうにシフトしているのではない。自然科学、社会科学と言われるものから人文科学、哲学とか宗教とか芸術、そういった分野でいろいろ考えていかなければいけない。人間が存在すること自体の、生きていく生き方の問題になっている。そういうことで、きょう「環境思想」のお話をしようとしているわけです。

誰もが思い当たると思いますが、日本人は飽食です。夜中もこうこうと電気を点けて、歌舞伎町なんかすごいですよね。2時、3時でも若い女の人が安全に歩ける珍しい街だといばる人もいますが、やっぱり日が暮れてから一晩中灯りを点けている必要はないのではありませんか。ちょっと考えてみると、かなり罰当たりな生活をしています。資源を無駄づかいして享樂の限り、欲望のままに生きているわけです。しかし、そんなことを続けていたら、地球がもたないのです。たとえば、

日本には車が8千万台弱あります。2人に1台以上の率です。そこで、中国の人たちが「中国は国土も広いし、日本のように鉄道が発達しているわけではないので、私たちももっと車がほしい。2人に1台、日本と同じぐらい車がほしい」と思ったとします。すると、6億台ぐらいの車が必要です。現在、世界で7億台くらいですから、世界の車は倍になります。そうすると、地球は壊れるかもしれない。だけど、それを「やめてくれ」と言ったら、僕が中国人だったら、「日本人が2人に1台もっていて、私たちがどうしてもってはいけないのか」と当然聞きますね。そのへんのところになると、お金の問題とかではなくて、皆でどうやってこの地球の中で生きていこうかという問題になるわけです。非常に単純に言えば、「日本人も5人に1台にするから、中国人も5人に1台にしよう」というような発想ですね。そういうったものが必要な時代に、もう入ってしまったている。

「大量消費、大量廃棄」と言われる生活パターンは変えなければいけない。変えるに当たって、これは生

き方の問題ですから、哲学だとか思想だとか宗教だとか、そういう課題になってくるわけです。ノーベル平和賞をもらったワンガリ・マータイさんは「日本には『もったいない』という、いい言葉があるじゃないですか。『もったいない運動』をやったらどうですか」と言っていますね。どの宗教も2千年前から「もったいないことをするな」とか「無駄づかいをするな」「欲望を抑えなさい」と言っているわけです。だから、逆に言うと、宗教の力が弱まったから環境破壊が起こったと言っても過言ではないのです。

汚い水を技術力できれいにすることも大事、法律で縛ることも大事。だけど、もはやその先にまでいって手当てをしないと間に合わなくなっている。今まで30年近く、世界と日本の環境問題の現場に行って、ずっと見ていると、ひとつも良くなっていなくて、全部悪くなっています。われわれが生きている間に何とかしないとダメです。われわれは死んでしまうからいいですが、これからの子どもたち孫たちは、われわれの負の遺産に大変苦しむわけです。

哲学の中でも、西洋哲学は人間と自然とを切り分けていきます。人間中心主義とよく言われますが、人間が自然界の主人であるということで、人間の都合のいいように考える伝統が長く続いて、それが行き過ぎて環境破壊が起こったのではないかと言われます。私も、

大筋ではそうだと思います。別に西洋が悪いと言っているわけではなくて、ものの考え方として、人間以外の生き物とか、そういったことを余りにも考えなさすぎたのではないかということです。ところが、1950年前後に、アメリカのアルド・レオポルドという学者などが、近代西洋社会の中で初めて「人間は自然の中の一部なんだ。生態学から考えて、そうなんだ」と言った。アメリカでは、もっと前にも、ヘンリー・デイヴィッド・ソローなど、比較的早くから環境思想的な考えがあったのです。その後、ノルウェーのアルネ・ネスという哲学者などが引き継いで、どんどんラジカルな思想にしていったりする。「ディーブエコロジー」と言われる思想です。世の中全体が、この5百年間ぐらいは人間中心主義でできていますから、それに代

わって、緑と自然との共生を前面に打ち出した哲学にしなければいけないのではないかとという考え方が徐々に出てきたわけです。それを称して「環境思想」という言い方をしています。

ヨーロッパやアメリカの環境NGOの人たちと議論していると、「今の環境破壊はヨーロッパを中心とした合理主義文明みたいなところから発しているから、同じ根っこにいるわれわれは、なかなか斬新なアイデアを生むことはできない。君ら東洋人は何か違った考え方をもっているのではないか。それを、ぶつけ合って何とかしようよ」と、よく言われます。かえって東洋人のほうが、あまり気がついてなかったのです。日本も高度成長で、お金のほうが大事だった。今の中国やインドを見ても、哲学とかこういうことよりは現実的な富のほうを求めているように見えます。しかし、江戸時代の思想とか、インドの思想とか、儒教だとか、いろんなものの中に、自然との共生を訴える考え方がたくさんあるわけです。それをもう一度引っ張り出して、勉強し直してみる必要があるのではないだろうか。

その時代に戻るのではないです。これから先の「新しい思想」をつくる糧とするということが大事ではないだろうかと思います。

子どもの感性は自然の中で育つ

レイチェル・カーソンという人がいますが、彼女は「感じることは、知ることより数倍大切ではないでしょうか」と言っています。「子どもに、植物や動物の名前を最初から教えないほうがよい」とも言います。知識を教える前に、感性や感動する心を高めていく。そうすれば子どもたちは自然のうちに、もっと知れたがります。子どもを自然の中に連れていけば、「この葉っぱと、この葉っぱは似てるけど、名前が違うのかな」なんて不思議に思いますね。桜の木を触ってツルツルしていたり、杉の木を触ってザラザラしていたり。「なぜか知らないけれども、私は桜のあのツルツル感が好きだ」とか、そういう感性、感覚のほうが大事なのです。

カーソンはこうも言っています。「子どもたちの世界

は新鮮で美しい。それは、驚きと感動であふれています。ほとんどの大人は、子どもたちがもっている、何かがきれいで、何が素晴らしいかを感じ取る、この感性を失っています。大人になるにしたがって、日常の雑事に心を奪われて、自然の世界の素晴らしさ、驚きを忘れてしまいます」

あと3年たったら部長になれるかなとか、ローンは何年で払えるかなとか、ふだんは、そっちが大事なんですね、毎日毎日。だから、自然の美しさなんか忘れてしまふ。皆さん、小さいときのことを思い出してみてください。きょう初めて学校に行く、きょう初めて電車に乗る、先生が初めて家に来たとか、毎日毎日が結構興奮します。私の長男が4歳ぐらいのときに「象を見たい」と言うので、上野動物園に行ったのですが、象の檻のそばまで来たら動かなくなって、ただ口を開けている。「もう象はいい」と言う。何が起こったか、親はわからない。後で家内が聞いてみたら、絵本で見た象はネコか犬ぐらいの大きさだったので、こんなでかいのが出てきたから、びっくりして動けなくなっ

らしいのです。そんな話を聞いて、われわれは笑うけれども、初めて見たらそうかもしれません。子ども、とくに小さい子というのは毎回毎回かなり新鮮なんです。そういう感覚で自然の美しさを感じ取っていくと、人間的には随分違ってくるのではないのでしょうか。

そのところをしっかりとしないと、たとえば、オゾン層があって、温暖化があつてとか、いろんなことが「頭」でわかつていても「体」でわかりませんね。「太陽から熱が来て、輻射熱というのが赤外線と一緒に外に出て行く。その出て行く部分を温室効果ガスがブロックするから、地球が温かくなる」——理屈はそうですが、本当にわかっているかという、全然わかっていません。ところが、小学校の入学祝いにお父さんが小さな桜の木を植えてくれたとします。10年たつて、自分が大学に行くころには大きな桜になって、毎年家族が楽しみにしている。そこへ温暖化が起こつて平均気温が1・5度上がったら、どうなるだろうか。自分たちの人生を育んできた桜の木が枯れてしまうかもしれない。そう思うと、1・5度上がるということは身

にしみて大変なことです。1本の桜の木から、温暖化が本当にわかります。頭の中で言つたつて何もわからない。そういうことも考えて、子ども時代の感性の鋭いときに、なるべく自然の美しさに触れさせたいかがでしょうか。

日本でも、作家の井上靖さんは「幼い者は鋭い感受性で、ものごとの最も本質的な部分を感じ取っているのだ」と言っています。言葉で表現できないだけであつて、秋なら秋、冬なら冬の感覚は、きちんと体にもつている。また、ジャーナリストの柳田邦夫さんは「感性豊かな作家や画家による優れた絵本は、詩と同じく、ものごとの本質的な部分を表現している。だから、60過ぎたら絵本を読もう」と言っています。ひからびた心に潤いをもたせてくれるから、いい絵本を読もうと。

今、私どもは、過疎地域に自然学校をつくつて子どもたちを連れて行こうという運動をやっています。その地域に住んで農業や林業をやっている人が先生になって技術を教えてくれるんです。実は、日本の農山漁

村の一番いけないところは、自信を失っていることです。農山漁村に自信と誇りを回復しなければいけない。素晴らしい伝統と文化をもっている農山漁村なのに、「東京のほうに行って金をもうけたほうが得だ」といった感じになってしまうと、世の中は狂ってきます。60年間田んぼをつくってきた人、つまり田んぼを60回つくったおじいちゃんは立派な技術をもっていて、あらゆることができます。百姓という言葉は百の姓^{かばね}で、百の仕事ができるという尊称ですね。そういう人たちに對して、高校生の孫が街のコンビニでバイトして、千円、2千円、日銭を稼いできて、それでいばって、60回田んぼをつくったおじいちゃんのほうが小さくなっている。こんなバカなことではないですよ。でも、現実にはそれに近いことが起こっています。そのへんのところを、ひっくり返さないと、さつき言ったような「感じる人」も出てきません。

5千年間、縄文時代からずっとつちかってきた日本人の知恵、山菜の採り方でもいいし、さまざまな昔話でもいいし、あらゆる生活の知恵を凝縮したものが思

想になっていくわけですから、そこがなくなったら何もなくなってしまう。狂ったネジが幾つかあるから、その狂ったところをうまく戻していけばいいと思います。過疎地域のお年寄り、自然の中では何もできない都会の子どもたちを引き合わせてあげて、それを何とか回していく方法はないか。農山漁村と都会の子どもたちと一緒にして、自然体験のようなかたちで制度化したら、どれほどいいかということなんです。そういう政策がなかなか出てこないの、もう少し強く政治家に言わないといけません。

日本もどんどん変わっています。環境問題がこれだけ知れわたつてくると、「このままでいいのか」と皆も思うようになるし、経済成長も緩やかになってきた。少子高齢化などを考えると、文化全体、日本全体が成熟化したものになってくると思います。おのずと、人々の生き方も変わってくるでしょう。20世紀型の前進主義のようなところから、ゆとりのある社会へ、そして、分をわきまえた生き方が必要になってくるのではないのでしょうか。何もこんな小さな国で世界2位の

GNPを意地を張って維持することはないです。10位ぐらいでちょうどいいかもしれません。もう少し節度のある生き方が必要じゃないかと思います。そうすれば、感性豊かで落ち着いた人が増えると思います。走り回っている日本ですよ、今はどこもかしこも。もうちょっとゆつくり歩く人がいてもいいんじゃないでしょうか。

もう一度自然に戻って、自然と人間のことを考えてみましょう。この地球に人間だけが生きているわけではありません。しかし「自然との共生」とはどういうことなのかというと、わかっているようでわかりません。

私の友達が、知床半島で「熊の水浴び」の写真を撮りました。熊は15メートルぐらいのところにおいて、こちらを、ちらっちらつと見るらしいのです。こっちのほうも、ちらつと見て、じつとは見ない。熊も、ちらつと見て、すぐパツと目をそらして水浴びを始め、遊んでいたらしいです。10分ぐらいして、ブルブルつとやって帰ったというのです。そのときもまた、ちら

つと見るのです。両方でちらつと見る。じつと見てみると、飛びかからなくてはいけなくなっちゃうから、ちらつと見るらしいです。そして、こういうことを彼は考えたのです。野生生物と人間がつき合うときに、お互いが無視しあえる「間合い」が必要だと。このときは15メートルだったけれども、13メートルぐらいが限度で、それ以上近づくと食われちゃうというようなことを言っていました。間合い、あうんの呼吸が必要だと言うんです。これは自然と人間についても、かなり言えるのではないか。人間の側からいえば、畏敬する、「敬して遠ざける」という態度です。傲慢に、こっちは偉いと思っていると、向こうは飛びかかってくるかもしれない。相互忌諱ということは、相互尊重です。人間だけの考えで対応しないで、相手のことも少し考える。だから、こちらも、ちらつとしか見ない。このこ出かけて行けば、お互いの境界線を破ってしまふ。今、人間は動物のことなんかお構いなしに出て行っています。

たとえば、皆さんが街を歩いていて、向こうから友

達が来るとします。友達には知らない異性と一緒だった。どういふ関係なのかわからない。「こんにちは」と言っているのか、知らないふりをするのがいいのか。大体知らないふりをします、不倫かもしれないから（笑）。向こうも、知らないふりしてくれてよかったなんて思う場合もあるのではないでしょうか。お互いが無視し合える「間合い」というのは、こんなことも一つの例になるかもしれません。

次は、「キタキツネ」のお話をします。知床半島の、マイナス30度ぐらいのところで、シャボン玉を飛ばして、地面に降りたら凍るかどうか、いい大人がそんなことをして遊んでいたそうです。ところが翌朝、そばにキタキツネの足跡が残っていたのです。わざわざ近くに立ち寄っていた。なぜだろうと、皆わからなかったらしいのです。思い当たったのは「これは、シャボン玉を見に来たんだ」と。直径5センチぐらいのシャボン玉が地面に落ちてきて凍るのだそうです。それを皆でキャアキャア、ワアワア喜んでいました。おそらくキツネはそれを見ていたのだろう。「あの人たちは何をや

っていたのだろう」と、わざわざ見に来て、凍ったシャボン玉を鼻で引つけて割っていったらしいのです。ここで研究している竹田律さんという人が、こういうことを書いています。「毎日観察している相手のキツネが、私を観察していることを知りました」（笑）。「この日から、木の陰、葉の陰、花の陰、あらゆるところから私を見ているキツネの視線を感じるようになりました」。これはすごいことです。

人間が自分勝手に観察なんかしているわけですが、考えてみたら、観察している自分が観察されていたわけです。あらゆる自然界がそうだと思います。カラスだって、スズメだって、人間のやっていることを見ているわけです。もしかしたら「バカなことやっているな。人間は自分たちが滅びるのもわからないで」と思っているかもしれませんね（笑）。そういったことが原点というか、今、一番大事なことです。そのあたりからスタートしていったら、自分なりの自然とのおつき合いの仕方、そして地球環境を考える方向に進んでいけばいいと思います。

江戸時代は環境重視の「ロハス社会」

今度は日本の江戸時代のことを、ちょっと考えてみようと思います。「ロハス」という言葉がこの2、3年はやっています。LOHASと書いて、Lifestyles Of Health And Sustainability、つまり「健康と環境（の維持）を考えての生活」という意味です。アメリカで1980年代から言われていたことですが、日本にも輸入されました。たとえば有機野菜とか、マイバックでもいいですね、割り箸じゃなくてマイ箸でもいい。油っぽいものばかり食べないとか、肉よりも野菜を多く食べるとか、いろんなロハスの生活があります。アメリカは金もうけしたいという人が多そうな感じがしますが、かなりの率で、環境とか健康に気をつけた生活をした人もいます。日本でも、そういう生活をした人「3割」というデータがあり、びつくりしました。無意識のうちに日本人がロハス的な生活に少し向いてきているのではないかと思います。

流行といえますか、あらゆることの最先端にいるの

は20代後半から30代の女性だと思っています。この人たちが一番自由になるお金をもっています。ですから、この人たちが動くところ、日本というのは動きます。女の人が動くと、男もくっついて動いていきます。余談になりますが、私が女子大で教えることを選んだのは理由があります。それは、「若い女性に環境問題を教えると、3倍の力が出るんじゃないか」と思ったからです。まず本人が変わる。すると、男がまねします。男に教えてもダメで、女の人にあまり影響を与えないです。女の人が変わると、若い男は変わります。本人とボーイフレンドが変わる。子どもができたなら、お母さんの影響で子どもも変わる。だから、男に教える3倍です。

さて、ロハスのことを考えると、江戸時代はロハスそのままです。たとえば1603年に幕府がスタートしたころは、江戸は完全な田舎ですから、街づくりなど、ものすごい大開発をしました。ところが、50年たつと「山川の掟」というものができます。もう開発してはいけませんよということです。基盤整備ができた

ので、これ以上はもうしないでおうと決めた。八代將軍吉宗のときに、どうしても足りなくなつて新田開發なんかちよつとやりましたが、江戸時代は初期の基盤整備を終わつたら、そんなに激しい開発は基本的にやっていません。今の日本だと、道路をつくつて、ダムをつくつて、いろんなものをつくつて、大体一通り終わつたと思います。整備新幹線も一部あつたとしても、いらぬものまでつくつてゐるのではないかと思うぐらいで、何百億円、何千億円というお金がいる。それを江戸時代の政治家は、一通りのことができたなら、そこにかかる金は税金から落としていった。減税したのです。今、道路1本つくらなければ、保育所もつくれます。先進国の中で、日本ほど保育所がなくて困つてゐる国はありません。女性が安心して子どもを預けて働けるシステムがない。また、年齢に関係なく、働きたいと思つた女性が何歳からでも働けるような仕組みがありません。それがないために、日本の優秀な女性の頭脳がどれだけ埋もれてゐるかと思ひます。

江戸というのはすごく大きくて百万都市です。幕末

には130万人ぐらいと言われています。そのうち、武士が65万人もいます。そして、お寺に5万人。町人が60万人。130万人というと、当時ロンドンには90万人、パリは60万人ですから、断然、大きい都市です。だけど面白いことに代官所の役人は290人なのです。あとは「市民自治」です。町年寄とかいろんな人がいて、全部タダでやるのです。

就学率は75%から86%。これは寺子屋です。当時、ロンドンが20から40%、パリは1・4%。庶民は勉強しなかつたわけです。ところが、江戸の庶民はやつてゐた。そして、寺子屋のお師匠さんで、お金を取つてゐる人は少ないのです。お坊さんとか、リタイヤしたお侍とか、たいてい、そういう人がタダで教えてゐる。現代で言えば、先生を定年退職した人がタダで塾をやつてほしいですね。近所の、勉強ができる子じゃなくても、できない子を引き受けて、週に3回ぐらいでも、タダで教えてあげる。そういうことによつて非行も防げるだろうし、いろんなことができると思ひます。江戸時代はやつてゐたわけです。

江戸時代は、日本列島の自然環境を悪化させずに、ある程度の生活や文化の水準を維持した大きな実験であったと言えます。島国でし、3千万人という人口はあまり変わらないわけです。鎖国でしたから基本的には自給自足で、なおかつ浮世絵だとか歌舞伎だとか、いろんな文化も発達し、他国と比べればかなり豊かでした。もちろん飢饉もありましたが、基本的にはあまり貧乏ではない。自然も乱開発をしないで守り抜いた。これで270年もやってきた。これは「宇宙船地球号」にとってモデルケースになれるかもしれません。地球しかないところに60億人もいて、皆ですつとうまく生きていくために、江戸時代の日本が結構参考になるのではないのでしょうか。

江戸には玉川上水など幾つかあって、上水道が整備されていました。これは世界でも江戸だけです。しかし、下水道はありません。なぜかという、下水に流すものがないのです。下肥が徹底的に利用されて、すべて近郊のお百姓さんが買って帰って使っていたからです。ちょっと脱線しますが、サラダなんかは昔の日

本では食べなかったですね。下肥がかかっているから回虫がいたりして危ないから、洗って、その後、煮て食べる。生野菜をバリバリ食べるのは戦後じゃないでしょうか。欧米から入ってきた伝統です。ともかく、都市は肥料の大工場だと言われていますが、長屋の衆が出した糞尿が全部高く売れて、大家さんの収入になったわけです。ロンドンでは当時、糞尿は下水に垂れ流したから、汚くしようがなかったです。テムズ川なんか汚れきっていた。しかし、隅田川では白魚が獲れたのです。これは大変な生活の知恵です。

クズ拾いの人もたくさんいました。紙は貴重品ですから。それから何でも直して使いました。煙管キセルの取替え、鍋釜の修理、雪駄直し、桶屋、提灯ちんどん張替え。灰屋なんていうのもありました。燃えた灰を買って行く人がいて、それで灰汁あけ抜きなどをしました。私の子どもころも、鑄掛屋とか羅宇屋ラウ、研ぎ屋とさんなど、いっぱい歩いていました。それから質屋とか古着屋です。地方に売られていく古着の売買は、1841年には江戸に4軒あって、1万両以上の商いでした。地方の人

たちは江戸の古着を安く買って、リサイクルしたわけです。そういうように、紙、灰、糞尿、あらゆるものがリサイクルされていました。そして、自然がきれいだった。日本橋のたもとでフクロウが鳴いていたというくらい緑いっぱいのは街です。確かに封建制だとかいろんな欠点があるかもしれませんが、街づくりに関しては素晴らしかったと思います。瓦屋根で統一されていたし、きれいな街並みだったのではないかと思います。それを明治になったら全部忘れて、皆ヨーロッパ、鹿鳴館です。ちょっと行き過ぎがあったかもしれませんが。日本の過去の知恵を見直してみる必要があるのではないかと思います。

「未来」のために「過去」に学ぶ

江戸時代には、いろんな思想がありました。幕府は儒教を利用したし、仏教もあった。石田梅岩という人は、商人の道とか儉約論というのをやります。「商人はお金をもうけなさい、ただし自分のためにもうけてはいけない」「私利私欲のためではなく、天下のためにも

うけよ」というのです。環境保護をやる人たちで言えば、グッズを売ったりして、うんともうけなさい。ただし、お金を自分の懐に入れるのではなくて環境保護のために使いなさいというような論理です。経団連でも、ちゃんと梅岩を読んでいまして、戦後の日本の経済復興のひとつの礎にもなったと言われています。

安藤昌益の思想もあります。ノルウェーのアルネスの『ディープエコロジー』という本に、ディープエコロジーの7つの原則が書いてありますが、そのうち6つぐらいまでは安藤昌益と同じです。世の中には偉い人・偉くない人という区別はないんだとか、働かない人は食べてはいけないということです。安藤昌益は、人間というのは天下の中で一生懸命働いて、自分で餌を獲って、そして死んでいくのだ、偉い偉くないとか階級だとか絶対おかしいと、そんなことを言いました。ディープエコロジーの原則も、ほとんど同じです。こういう思想を比較検討して、勉強し合うというのは大事だと思います。

また、本居宣長は「もののあわれ」を主張しました

が、そういうところに日本人の自然観というのがあるのではないでしょうか。たとえば、日本で環境教育と言いますと、ネイチャーゲームだとか、バードウォッチングなど、アメリカ・ヨーロッパから輸入したものが結構あります。「振り返り」とか「分かち合い」とか、日本語にはちょっと合わないような言葉もあります。分かち合いは多分 sharing の訳だと思いますが、何かピンとこないですね。たとえば漢語を使うとか、日本ならではの環境教育のプログラムをつくれればいいと思います。日本人が自然の中で遊ぶ古くからの遊びもあります。とくに原点となるのは日本人の自然観とか、自然に対する日本人の感性とかで、そのDNAみたいなものをもって今の子どもたちは生きているわけです。桜の花が散ってきれいだとか、そういう感覚的なものも踏まえた上でプログラムをつくらないと、隔靴搔痒といいますか、お勉強のための環境教育になってしまつて、本当に納得できる環境教育はできないのじゃないかと思います。ですから、日本人は昔、こういうことを考えていましたよ、ということも、もう少し現

代に還元するような研究が必要ではないかと思います。すごく荒らっぽい言い方になりますが、東洋思想の研究も環境問題の視点から一度考えてみる必要があるのではないのでしょうか。宝はたくさんあります。仏教もそうです。いろんな経典もある。儒教でも環境思想と同じようなことをたくさん言っています。インド、チベットの信仰、これも深いものがたくさんあります。日本や韓国、東南アジア、また、アメリカ先住民だとか、アフリカにもあるのではないのでしょうか。ヨーロッパ型のキラキラした文明に目を奪われて、肝心なことを忘れているんですね。もう一度、人類の知恵を皆で掘り起こして、並べてみて、プラスになるものはないかたいて、それで皆で21世紀、22世紀に向かっての哲学を検討していかなければいけない。

人類の方向性——「平等」か「弱肉強食」か

地球環境問題は抜き差しならないところにきているわけです。だけど、京都議定書で決めたことを守るのは、日本は非常に難しい。そして、アメリカは脱退し

ちゃったわけです。アメリカの経済に悪影響を及ぼすというんですね。地球人類が死ぬか生きるかという話をしているのに、自分のところの経済が悪いからなんて、とんでもない話ですよね。では、京都議定書がなぜ動かないか。それは大きい方向性が見えていないからだと思います。どういう人類社会にするのか、どういう人類の生き方がいいのか、どういう方向がいいのか、というのがバラバラなんです。

とくに移民の国、アメリカとかカナダとかオーストラリアとか、新しい国は比較的、「弱肉強食」です。「貧乏人は、本人が悪いんだ。努力すれば金もちになれるのに努力しなかったじゃないか」という論理です。アメリカ人が西部に向かって開拓に行った。途中で襲われて死ぬかもしれないところに、幌馬車で家族全員、小さな子どももみんな連れて行く。運の悪い人は死んで、頑張った人たちだけが生き残る。だから、生き残った人の発想はどうしても「強い人の発想」です。「強い者が残ればいいじゃないか」という基本感覚です。「弱者の発想」はもちにくい。ですから、アフリカの弱

い国が、どうやって生き残るかを考えたりするときには、難しい状況があるわけです。

それでは、人類社会はどうしたらいいのか。たとえば、インド人とアメリカ人の二酸化炭素を出す量はかなり違います。「国家」の単位で比べると、アメリカはインドの5・3倍ぐらいの量を出します。ところが「一人頭」で比べると、インドは人口が多いから、22倍の差になる。そうすると、CO₂の削減といっても、個人個人の量で決めると、インド人はもったいばい使えるわけです。アメリカ人は大きく減らさなければいけない。だからアメリカは「国家単位でやろう」と譲らないわけです。しかし、インドや中国にしてみれば、私たちはまだまだ発展したいのだ、まだ国民は貧乏なんだ、うちの国民はテレビを観てはいけないのですか、クーラーを使つてはいけないのですかということになる。

さっき言った、中国は自動車をもつてはいけないのですかというような話になるわけです。大げさに言えば、アフリカの子と、バン格拉デシュの子と、

日本の子と、ヨーロッパの子がみんな同じような条件で生きていかれて、勉強したいと思う子は勉強できる、どこの国でも大学に行きたい子は行くことができる、そのような状況をつくり出すのが人類の方向なんだと決まれば、「二人頭」で計算するわけです。だけど、弱肉強食的な発想で言えば「国家単位」になる。弱い国はダメですと。どちらの方向を人類の方向としようとしているのか、そこが見えないので各論で割れるわけです。温暖化の交渉がどうしても最後までうまくいかないのは、この壁が越えられないのです。

ですから、どこかの宗教に統一するとかいうことではなくて、いろんな宗教のいろんなところを大まかでもいいですから、平等の方向に歩いて行こうとか、弱肉強食で行こうとか、そのへんのところをそろそろ決めていかないといけない。

私のきょうの結論ですが、東洋思想の研究者の方にもう一回、思想を見直していただいて、西洋哲学に對峙してみる。それが急務だと思いますので、ぜひ東洋哲学研究所にやっていただきたいと思います。日本に

も、中国にも、インドにも素晴らしい考え方もあるし、研究者もたくさんいらっしゃいます。そういう方々にそろそろ出て来ていただく時代になっているのではないかと。西洋中心の考え方だった世界が、環境問題を機に、東洋の思想も必要になってきた。人間中心主義から自然共生主義というような方向へ、世の中が少し変わってきたので、その中で宗教や、哲学や、人の力も非常にこれから大事になってきます。

なかでも宗教というのは大きな力ですから、皆さん、ぜひ環境問題と自分たちの考え方を合わせて、議論を重ねていただければと思います。

(おかじま しげゆき／(社)日本環境教育フォーラム理事長
大妻女子大学教授)

(本稿は、2007年11月5日に行われた当研究所主催の
公開講演会の内容をまとめたものです)